



## 日本音楽教育学会ニュースレター

### 目次

1 日本音楽教育学会第44回大会（弘前大会）報告	
1-1 第44回大会を終えて .....	2
1-2 院生フォーラムを終えて .....	3
2 会員の窓	
2-1 2013年夏！新しい音楽教育を考える会（ICMAC）第6回音楽づくり ワークショップ／第26回タグマック研究会 参加報告.....	3
2-2 立教ゼミナール「A：英語で研究を海外に発信しよう！」 に参加して .....	4
2-3 立教ゼミナール「B：最先端の授業研究を学ぼう！」 に参加して .....	5
3 海外トピック	
3-1 立教ゼミナールを終えて .....	6
4 韓国音楽教育学会大会における基調講演について .....	7
5 新刊紹介	
5-1 The Oxford Handbook of Children's Musical Cultures. ....	8
5-2 Musical Childhoods of Asia and the Pacific. ....	9
6 報告	
6-1 平成25年度第3回常任理事会報告 .....	9
6-2 平成25年度第2回理事会報告 .....	10
6-3 平成25年総会報告 .....	12
6-4 国際交流委員会から .....	18
6-5 編集委員会から .....	18
7 事務局より	
7-1 個人情報の提供と取り扱いについて .....	19
7-2 お知らせ .....	20

編集後記

# 1 日本音楽教育学会第44回大会（弘前大会）報告

## 1-1 第44回大会を終えて

大会実行委員会事務局長 石出 和也

日本音楽教育学会第44回大会（弘前大会）が10月12日と13日、弘前大学教育学部と50周年記念会館を会場として開催されました。「桜」「ねぷた祭り」「紅葉」などの弘前の風物詩は、どれもポスターやパンフレットの中の写真でしか見ることができない、そのような時期ではありましたが、バスや電車の車窓から見えるりんごの実に津軽の雰囲気を感じた方もいらっしゃったことと思います。さわやかな秋晴れとはなりませんでしたが、前日までの雨と風が少しおさまった中での2日間、特段大きなトラブルなどもなく大会を終えることができました。まずは、ご参加いただいた約300名の皆様に（うち正会員267名、臨時会員47名）、大会実行委員の一人として心から感謝申し上げます。大会実行委員会による準備が本格的に始動したのは、今年の4月下旬でした。今回の実行委員13名は東北地区を中心とする広域で組織されていましたので、5月上旬に第1回目の打ち合わせを実施して以降、大会前日までの打ち合わせはすべてメーリングリスト上での審議によって進めました。大会実行委員長の今田匡彦先生には大会全体の総括をはじめ、基調講演とシンポジウムの企画、そして、ポスターやプログラムのデザインに関わる連絡調整をご担当いただきました。副実行委員長の浅野清先生には主に、弘前大学附属国際音楽センターとの共催に関わる準備をご担当いただきました。

大会事務局長を仰せつかった私は、文字通り、事務的な準備作業の総括をさせていただきました。最初に着手したのは、大学施設借用手続き、弘前市観光協会への助成金申請、実行委員会メーリングリスト開設とそこでの審議ルールの設定、学会本部からの準備金にもとづく会計予算案の作成などでした。いずれも今では遠い昔のことのようです。5月以降は、使用教室の機材とレイアウトの確認や、ブース出展企業との打ち合わせなどをはじめ、各方面との連絡調整や書類作成に明け暮れる日々が始まりました。過去のプログラムや大会報告、会計報告などを参照しながらの準備作業とはいえ、私自身は学会の大会運営に携わった経験は全くありませんでしたので、実際には多くの部分を想像力と直観で補わなければならず、決して楽な作業ではありませんでした。そこで、できるだけ円滑に準備を進めるため、実行委員会の運営組織を4層に分けました。実行委員長と副実行委員長と事務局長を第1層として、第2層（大会前日までの業務）には「ホームページ係」「広告・ブース出展係」「プログラム・教室配当係」「物品・大学生協係」を設け、その業務内容を引き継ぐ形で第3層（大会当日の業務）に「会場設営係」「受付係」「院生フォーラム係」「昼食係」「懇親会係」を設けました。そして、第4層は学生スタッフです。会場校の実行委員人数が限られていたこともあり、当初から、機動力確保のため学生スタッフ体制を強化しながら企画運営に臨むことが決定していました。早い段階で学生スタッフのリーダーを決め、大会事務局長とほとんど同じ目線で全体の構想に携わってもらいました。大会に向け学生スタッフと幾度も話し合いの場を設け、連日、長時間にわたり準備作業を手伝ってもらいました（中には教育実習期間と重なり、体調を崩しながら奮闘してくれたスタッフもいました、ごめんなさい）。私自身の心境としては、学生スタッフの存在無くして大会を振り返ることはできません。本当に助かりました。結果的には、教育学部の改修工事完了に伴い教室機材が新調されたことなども功を奏し、大きなトラブルも無く大会を終えることができました。ですが、大学食堂の急な休業や、受付場所への案内看板の少なさなど、一部参加者の皆様にご不便をおかけした面もあったかと思ひ、反省しているところです（特に教育学部横でタクシーを降りた方々には、受付場所がわかりにくくご不便をおかけいたしました）。最後になりますが、不慣れな大会事務局長を支えていただいた本部事務局の皆様と大会実行委員の皆様をはじめ、第44回大会にお力添えいただいたすべての方々に、改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 1-2 院生フォーラムを終えて

弘前大学大学院修士課程 大坪 千佳

日本音楽教育学会第44回大会において、院生フォーラムの企画・運営を担当させていただきました。今回の大会は地方開催ということもあり、どのくらい参加者が集まるのか不安でしたが、結果として、全国から11名の院生にご参加いただきました。

大会当日までの段取りとしては、院生フォーラム申し込み締め切り後(9月中旬)、参加者へ第一次連絡(当日集合時間と用意するポスターのサイズのお知らせ)をし、その後(10月上旬)第二次連絡(企画内容の詳細と各参加者の名簿と発表タイトルのお知らせ)をする、という流れでした。その間、弘前大学内において企画運営の話し合いや備品の手配、準備など、大会実行委員会の先生方にお手伝いしていただきながら進めていきました。

今回、新しい試みとして、ポスターセッションの他に、参加者同士の交流の場を提供するという目的として、ディスカッションの時間を設けました。内容としては、各院生の自己紹介と研究概要、そして音楽教育関連の講習会やセミナーに参加した時の報告を参加者の皆様に話していただく、というものでした。短い時間だったため、「話し合い」とまではいきませんが、他大学の院生がどのような問題意識を持ち、どのような方法で研究を進めているのか、などを聞くことができ、とても有意義な時間となりました。また、皆で輪になって座り、とてもアットホームな雰囲気の中でディスカッションが進行しました。そのため、参加者全員の個性や考え方に触れられる機会になったと感じると共に、私個人も含め、弘前大学の院生も輪の中に入って参加したことにより、予想以上の大きな交流と繋がりが持てたと感じます。

また、今回、院生フォーラムのポスター掲示スペースが他の発表会場から少し離れた教室に配置されていましたが、ポスターセッションの時間には多くの方々に足を運んでいただきました。絶えず観覧者の出入りがあり、活発な意見交換がなされていたことがとても嬉しかったです。ただ、展示スペース自体あまり広くない教室であったため、少し混雑した時間帯があり、ポスターをご覧頂く時間を十分に確保できなかったのでは、とも感じました。ポスターセッション終了後も展示していましたが、人通りの多い通路にポスターを移すなど、もっと多くの方がポスターをご覧頂けるよう配慮すればよかった、と感じます。ですが、一つの教室に11名全員のポスターを貼ることが出来たため、参加者同士の距離が近く、参加者がお互いに質問し合うなどの場面が見られました。狭いからこそその利点もあった、と考えます。

今回の院生フォーラムの企画・運営を振り返って、本企画は、実行委員の先生方から助言を頂きながら、また当日は参加者の院生の方々と一緒に考えながら形作っていったものだと感じます。加えて、ディスカッション企画において、セミナーなどの報告を事前に依頼した参加者の方々には、急な連絡にも関わらず、快く役割を引き受けていただきました。当日は大変興味深い報告を聞くことができ、私自身にとっても、今後どのように自分の研究に活かしていけるのかを考える機会を得られました。また、会場設営の準備や後片付けなど、参加者の方々が自主的にお手伝いをしてくださり、スムーズに企画を進めることが出来ました。皆様のご協力なくして成功し得なかった、と感じます。今後も、このような企画によって、院生同士の交流と意見交換の場が発展していけば良いと感じました。ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

## 2 会員の窓

### 2-1 2013年夏！新しい音楽教育を考える会（ICMAC）

#### 第6回音楽づくりワークショップ／第26回タグマック研究会 参加報告

オークランド大学 近藤 真子

2013年8月17(土)・18日(日)の両日、新しい音楽教育を考える会主催、坪能由紀子先生(日本女子大学)企画・構成による第6回音楽づくりワークショップと第26回タグマック研究会が日本女子大学目白キャンパスにて開催された。全国各地から研究者、現職教員、院生を



中心に多彩な顔ぶれが集まり、熱気と興奮に包まれた濃密な2日間となった。この音楽づくりワークショップは毎年同大学にて開催されているもので、音楽づくりの実践的なアイデアを参加者が持ち寄り皆で体験する貴重な場となっている。翌日の研究会では、『音楽づくりの秘密』と題し、イギリスを代表する音楽教育者、ジュン・ティルマン（June Boyce-Tillman）先生をお招きしてのレクチャーとワークショップもあり、初来日の彼女から、音楽づくりに関するたくさんのお話を伺うことができた。

参加者一人一人が、即興の楽しみを存分に味わい、明日の授業や研究へとつなげていけるような大変充実した内容であった。今回私は、通訳として参加させて頂いた。

今年のテーマは即興。まずは、教育心理学者・大家まゆみ先生（東京女子大学）による『出会いと人間関係づくりー構成的グループ・エンカウンターー』のレクチャーから始まった。音楽づくりでは、仲間同士の「かかわり方」が重要なカギをにぎることがしばしばあるが、ここでは、人間関係づくりの技法について実際のアクティビティーをとおして体感することができた。その後、参加者たちは、和気あいあいとなった雰囲気の中、小グループに分かれ様々な即興音楽づくりに挑戦した。【課題：さまざまなタイトル（坪能由紀子）、アフリカの音楽（東京藝大院生）、Jazz（塩川延明先生率いるプロのJazz演奏家）、J-pop（木下和彦）等による即興音楽づくり】最後の発表会では、グループごとに作品を披露した。たくさんのお話があり非常に興味深かった。またワークショップでは「連続するリズムパターンの中に“驚き”の場面をつくる」即興音楽づくりに挑戦。パワフルな彼女ならではの巧みな指導に導かれ、グループごとに仕上がった作品は、どれもエネルギッシュで音楽的にも質の高いものとなった。また作曲者でもある彼女らしく、作曲者（達）の意図がどのように音楽づくりに反映されているかを我々参加者全員に考えさせる機会を与えてくださったことは興味深かった。これは、更に発展した音楽づくりにつなげていくための重要なポイントであるかも知れない。



翌日のティルマン先生のレクチャーでは、1980年代の世界の音楽教育に大きな示唆を与えた彼女の螺旋状モデル「子どもの音楽的発達の様式性」<sup>1</sup>（1986）をさらに発展させた、音楽づくりにおけるスピリチュアルな美的経験についてのお話があり非常に興味深かった。またワークショップでは「連続するリズムパターンの中に“驚き”の場面をつくる」即興音楽づくりに挑戦。パワフルな彼女ならではの巧みな指導に導かれ、グループごとに仕上がった作品は、どれもエネルギッシュで音楽的にも質の高いものとなった。また作曲者でもある彼女らしく、作曲者（達）の意図がどのように音楽づくりに反映されているかを我々参加者全員に考えさせる機会を与えてくださったことは興味深かった。これは、更に発展した音楽づくりにつなげていくための重要なポイントであるかも知れない。

今回の参加を通して印象に残ったことは、参加者全員が音楽づくりに対する想いを強く持っていること。そして、それを共有する中で、参加者自身が自ら創ろうとする音楽づくり・学びの場、喜びの空間が生まれてきたことである。今後の継続と発展を願うとともに、日本の新次世代の音楽づくりの活動に期待したい！

<sup>1</sup> Swanwick, K. & Tillman, June B. (1986), “The Sequence of Musical Development.” *British Journal of Music Education*, Vol. 3. No. 3, November pp. 305-337. (坪能由紀子訳「音楽的発達の様式性ー子どもの作品研究1～3ー」『季刊音楽教育研究 61～63』音楽之友社)

## 2-2 立教ゼミナール「A：英語で研究を海外に発信しよう！」に参加して

東京藝術大学大学院修士課程 伊原 小百合

去る2013年8月24日（土）・25日（日）、第12回音楽教育ゼミナールが立教大学池袋キャンパスに於いて開催された。2本立てのプログラムからなる今回のゼミナールのうち、筆者が参加したのは「A：英語で研究を海外に発信しよう！」である。司会者である今田匡彦先生（弘前大学）が仰っていたように、近年アジアの若者が積極的に国際学会に参加するなか、最近では日本人の発表が少なく、今回のゼミナールでは海外の学会で発表する際に役立つような実践的なプログラムが企画された。

初日ではまず、Mimi Hung-Pai Chen 先生（中国文化大学）による基調講演がなされ、先生ご自身の英語経験を拝聴した。学生時代は英語に苦手意識を持っていた Chen 先生が、当時辞書をひきながら読んでいた文献を実際に見せて頂き、現在流暢に英語でお話しされる先生からはとても想像のつかない過去の姿に驚くとともに、継続的な英語の学習と意欲が必ず実を結ぶことを実感した。後半は2人1組となり、英語で相手を紹介する時間をもち、最後に Chen 先生から英語学習の方法やポイントを伺った。

2日目の午前は柴崎かがり先生（Roehampton University）によるワークショップが行われ、国際学会で使うことのできる英語表現や質疑の言い回し、見やすいパワーポイントの作り方など、実際に英語でプレゼンテーションを行う際の具体的なテクニックを学んだ。午後は午前中教わったテクニックを基に、各々が自身の研究を英語でプレゼンテーションする準備を行った。そして最後に一人ずつ発表する時間をもち、国際学会で発表するプロセスを実際に体験した。

今回のゼミナールを通して、英語に対する漠然とした不安が取り除かれるとともに、英語は単なるひとつの手段であり、国際学会において重要なのは英語の上手下手ではなく、研究そのものの内容であることが再確認された。また英語という言語で自分の研究を考えることで曖昧な部分が明るみに出て、思考がより明確になることをそれぞれが実感した。2日という短い期間ではあったが、英語そのものへの学習意欲が高まっただけでなく、海外へ出てより多くの人と意見を交換したい、という意識も強まり、大変刺激的な時間であった。

## 2-3 立教ゼミナール「B：最先端の授業研究を学ぼう！」に参加して

東京学芸大学大学院博士後期課程 塚原 健太

2013年8月24日（土）～25日（日）に立教大学池袋キャンパスで開催された、第12回音楽教育ゼミナール（立教ゼミナール）の「最先端の授業研究を学ぼう！」では、会員・非会員を問わず学校教員、大学院生、研究者など様々な立場の40名の参加がありました。プログラムは、東京大学の藤江康彦先生による「授業研究をおこなうにあたって」、聖心女子大学の河邊貴子先生による「子ども理解につながる記録のあり方」という二つの講演、そして荒川区立尾久第六小学校の石井ゆきこ先生が行った授業のビデオと記録を基にした参加者全員による授業研究でした。

藤江先生の講演では、授業研究の多様な様相を、授業研究の目的、授業研究の方法、研究者の立場、授業研究の対象、授業研究の視点、授業研究の問いという観点から整理して下さるとともに、授業研究における質的研究法の特徴についてお話がありました。

河邊先生の講演では、保育において保育記録が重視される理由と、保育記録が果たす役割について様々な事例に基づいてお話がありました。私は保育現場における記録の実際に触れるのは初めてでしたが、保育記録が果たす役割からは学ぶことが多くありました。特に、子どもの姿、そこでの経験・育ちを保育者が捉え、次に必要な経験を考え、ねらい・内容を設定し、それを具現化するために環境の構成・再構成を行うという、保育記録が生み出されていく一連のプロセスは、まさに保育者が子どもとともにカリキュラムを紡いでいくこととすることができます（カリキュラム概念の多様性については『音楽教育学』43(1)を参照）。こういった観点から言えば、保育の場合のような厚い記述が可能かは別として、小学校以上の学校教育においても示唆を得られると感じました。

参加者が数人のグループに分かれて行った授業分析では、参加者それぞれの立場や視点の違いによって一つの授業場面が多角的に捉えられ、自分だけでは見えなかった事実が発見されていくという貴重な体験をすることができました。グループで議論した内容を全体で共有し、そこに石井先生が授業者として捉えた事実を合わせて授業を多角的に捉えていくことにより、授業者の新たな気づきや参加者の全員の力量形成に繋がっていくという過程は、まさに権藤敦子実行委員によって紹介された「授業カンファレンス」（稲垣忠彦 1986『授業を変えるために』国土社）として機能していたと思います。

このように非常に有益な情報や気づきを得られた本会でしたが、その一方でいくつかの課

題もあると感じました。まず実際に授業研究を行うにあたっては、ほんの一場面のビデオを短時間で見て、そこから各々が気づいたことと、石井先生による説明を基に議論が行われました。そのため、各々が捉えた事実が果たして妥当なものなのか、実際の子どもたちは何を思い、何を学んだのかということまで議論を深めることができませんでした。このためには保育記録の方法などに学びながら、各々が詳細に記録を取っていくことによって、授業を見る目を養っていくことも必要ではないかと感じました。また藤江先生のお話にもあったように、授業研究を行う者がどういった目的や立場で取り組むかによって授業研究の方法は異なります。本会には、日々の授業改善に取り組んでいる現場の先生方、修士論文執筆のために授業研究の方法を模索している大学院生、自身がこれまで行ってきた授業研究の方法を更に深めたい研究者など、多様な目的意識を持った参加者が集まりました。そうした問題関心の違いに対応していくことも必要だったのではないかと、実行委員の一人として考えました。

### 3 海外トピック

#### 3-1 立教ゼミナールを終えて

ローハンプトン大学 柴崎 かがり

8月に行われた立教ゼミナールでは、「英語で日本の研究を海外へ発信しよう」というテーマのもと、講演やワークショップが行われました。1日目の講演では、Mimi Chen氏から国際学会で研究発表をする意義について、ご自身の体験やその時々抱えた悩みなどを交えたお話をいただき、国際学会に対する意見や悩み・不安を参加者の方々と共有する機会に恵まれました。2日目は、国内・国際学会におけるそれぞれの経験をふりかえった後、学会で役立つ発表のスキルや英語のフレーズ、英語で発表する際のパワーポイントの構成、発表までに必要な準備についてワークショップを行いました。その後、参加者全員がそれぞれの研究を英語で準備・口頭発表を行って、来年開催される国際学会での研究発表を視野に入れてゼミナールを締めくくりました。

最近「国際化」という言葉を度々耳にするようになりましたが、ヨーロッパ諸国においても、この「国際化」にどう対応していくかという点について、学会参加者の間で必ず話題になるキーワードです。ヨーロッパの多くの国で、音楽教育学や音楽心理学における研究の共有を目的とした国際交流がこの5、6年はとても活発に行われており、エストニア、ラトビア、ルーマニアなどはその取り組みが特に熱心な国としてあげられます。たとえば、年次大会については国内だけではなく他のヨーロッパ諸国へ宣伝をして多くの発表者を募っていることや、国内からの参加者で構成される学会の基調講演や研究発表を英語で行って国際学会への発表につなげることで、学会誌については外国からの投稿を常に受け付けて査読をし、ページの左側に母国語・右側に英語訳をつけて出版しオンラインでも閲覧できるなど、研究を広く発信しようと積極的な取り組みが行われています。

イングランドも様々な学会を通して研究の発信をしていますが、今回はイングランドの音楽教育の課題についていくつかご紹介させていただきたいと思います。

はじめに、イングランド、特にロンドンにおける多くの小中学校が文化・国籍・社会階級の異なる子どもたちで構成されているため、全ての子どもがバックグラウンドに関わらず平等に音楽の授業に参加・貢献をして音楽を楽しむためには、教師がどのような教材を授業に取り入れて実践するべきかという課題があり、このトピックに関わる研究は度々学会で発表されています。

次に、小学校における音楽の授業は、ナショナルカリキュラムがあるにもかかわらず学校間で非常に異なる場合が多いため、複数の小学校の子どもたちがひとつの中学校へ進学した際に音楽学習経験が異なる子どもたちをどのように指導していけばよいのかという課題があります。

また、ナショナルカリキュラムにおいて情報通信技術（ICT：Information and Communication Technology）の活用が強調される中、音楽の授業にICTを効果的に導入していく方法や、子どもたちの音楽学習にどのような変化を与えるのかという研究に加えて、最近では様々

なコンピューターソフトを使って音楽をつくる知識や技術を持っている子どもが増えていることから、ICTについて高度な理解が必要であると感じている教師も増えており、テクノロジーの変化に対応できる教員養成のあり方が課題となっています。

イングランドの学会ではこれらの課題に関連した発表が毎年含まれておりますが、研究のトピックが非常に個々であることも面白い点で、学際的(Interdisciplinary)、特に社会文化的(Socio-Cultural perspectives)な視点からの研究が増え続けているように見受けられます。また、研究法については、心理学の領域で質的な研究を今後増やしていく必要性が強調されており、教育学の研究においては質的・量的の両方を用いたMixed-Methodのアプローチが少しずつ増えている傾向にあります。

最後に、イングランドの小中学校の先生方から伺うことは、自国の伝統音楽や楽器を導入する機会が少ない現状をどう改善すればよいのかという点です。近隣のウェールズやスコットランド、アイルランドでは、伝統音楽や楽器を用いた実践が積極的に行われていますが、イングランドではその実践や研究がなかなか増えない傾向にあります。これは先に述べた課題のひとつである様々な背景をもった子どもたちで学校が構成されていることと関わっているため、結果として新たな課題を生み出しているように思われます。この点において、日本では、日本の伝統音楽や楽器を導入した実践や研究が数多く行われているため、授業にそれらを導入する意義や具体的な指導方法・研究方法を積極的に国際学会で発表していくことで、日本が果たす役割はとて大きいのではないかと感じております。

今後、国際化へ向けた取り組みは、日本のみならずヨーロッパの国々でもますます活発に行われていくものと考えられます。今回のゼミナールでは、特に大学院生がワークショップで積極的に発言し、国際学会で研究を伝えていきたいという熱心な姿勢が印象に残りました。また、ゼミナール終了後には、参加者の方々からゼミナールの次回開催についてご意見やご要望をいただきましたので、今回をひとつのきっかけとして、次へつなげていくことが大切だと思っております。

## 4 韓国音楽教育学会大会における基調講演について

日本音楽教育学会会長 加藤 富美子

本学会の姉妹学会である韓国音楽教育学会のヤン・ジョンモ会長より招聘を受け、2013年8月8日に韓国音楽教育学会第44回大会(大会テーマ:理解と共感のための音楽教育 会場:誠信女子大校)において基調講演を行なってきました。

韓国音楽教育学会との研究交流は、2003年に姉妹学会として交流協定を結んで以来、さまざまな形で行なわれてきました。日韓音楽教育合同ゼミナール(2008年)、韓日音楽教育合同ゼミナール(2010年)、日韓音楽教育ワークショップ(2012年)と両学会の共催で隔年に開催してきたゼミナールやワークショップはその中心となるもので、大きな成果をあげてきました。昨年8月の日韓音楽教育ワークショップの折にヤン・ジョンモ会長と今後の研究交流の在り方について懇談する機会があり、韓国音楽教育学会としては年次大会に日本音楽教育学会から講演やワークショップを招くという方法が、全会員にとって有益な交流となると考えているというお話がありました。今回の基調講演は、その流れから実現したものです。

### 【講演要旨】

講演テーマ:「理解と共感のための音楽教育—世界の諸民族の音楽を教材として—」

「理解と共感のための音楽教育」という大会テーマを自身の研究分野の一つである世界の諸民族の音楽を教材とする音楽教育の立場からとらえる。音楽教育で世界の諸民族の音楽を教材とするという方向は、韓国でも日本でもますます盛んになってきており、韓国の音楽教科書では、日本よりも更に多様な世界の諸民族の音楽がとて充実して取り上げられている。これら、世界の諸民族の音楽を教材とする音楽教育の多様なねらいのうち、大会テーマをふまえて音楽による他者理解・多文化教育をねらいとする音楽教育について取り上げる。

他者理解を国、民族、地域、あるいは個人と、どのようなレベルでとらえるのか、音楽文

化の何を理解しようとするのかは難しい問題である。また、音楽は民族性や文化的特性を強く反映するものであるだけに、その嗜好は個々に根強いものがある。音楽が相手理解・他者理解につながるためには、自分と異なった文化の音楽に関心を持ち、相手の文化を尊重し、相手の理解につながるような音楽教育が求められる。この数年に世界各地で出会ってきた音楽を例として考えていきたい。

2010年に訪れた中国の少数民族トン族の女の子たちによる多声合唱、2011年秋に訪れた中国内モンゴル東ウジムチンのモンゴル族の小学校でのこどもたちの歌、同じ地区の伝統的な住居のゲルのなかでのお年寄りの歌など（映像で紹介）では、合唱の概念を変える出会いやオルティンドーのイメージを変える出会いなど、音楽を通じた相手の文化の尊重、相手の理解につながる出会いが数々あった。他者の音楽への嗜好の問題については、「声が大きく揺れるのが嫌い」などパンソリへの日本の大学生たちの言葉からは、最初の出会ってから音楽をとおして相手の文化の尊重や理解につながることは難しいことがわかる。

これらの課題を乗り越えるためには、聴き比べによる理解、表現による理解などの方法があることを述べ、その例としてアジア各地でのコト類の楽器の聴き比べを映像として紹介した。また、表現活動による理解としては、日韓のそれぞれの教科書における相手国の楽曲の表現活動がふさわしい内容となっているかを確かめることを提案し、それぞれが編集した教科書のなかからヤン会長は「こもり歌」を、加藤は「アリラン」を歌ってフロアから評価をもらった。ヤン会長の「こもり歌」は完璧な日本の歌となっていた。

今回の交流を通して、ヤン会長からは、「音楽を通じた他者理解」という視点が新鮮であり大会テーマにつながる基本的な視座を得たと言っていただきました。また、日本における諸民族の音楽の視聴覚教材の充実についても多くの会員から質問を受けました。その他、日本民謡や沖縄民謡の指導方法についてもたくさんの質問がフロアから出たことなど、研究交流として一定の意義があったことを嬉しく思います。

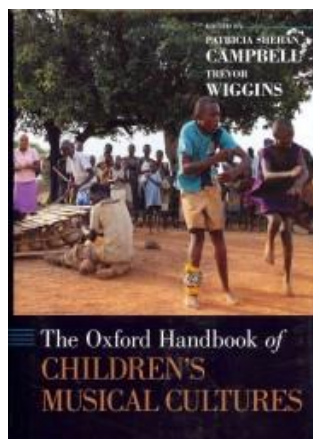
なお、今回の基調講演にあたっては、東京学芸大学大学院の留学生バンジへさんに通訳、翻訳、先方の学会との調整などすべてを担当してもらいました。これからの両学会の研究交流にとって、留学生の方々の力を生かしあっていくことも、とても大切なことと改めて感じました。

## 5 新刊紹介

### 5-1 The Oxford Handbook of Children's Musical Cultures.

北海道大学 安達 真由美

総勢40名の著者が、北中南米、欧州、アフリカ、アジア太平洋地域、オセアニアにおける子どもたち自身の、あるいは子どもたちを取り巻く音楽文化について、民族音楽学、民俗学、教育学、発達心理学の観点から検討した本です。全35章の柱となっているのは、次の三つトピックです。



\* **文化との関係性**: 社会化、アイデンティティ、伝統の更新、文化の中での個人的経験など

\* **教育・発達における音楽**

\* **テクノロジー**: 音楽的な行為・関心に与える影響力、利用の仕方、反応など

それぞれの章からは、歌い手として、踊り手として、弾き手として、あるいは聴き手として、子どもたちがそれぞれの社会・文化・教育環境の中で、あるいは特定の歴史的文脈の中で、どのように“音楽している（いた）”のかを読みとることができます。

日本に関しては、第5章（Manabe）で第二次大戦中に就学児童に歌われた歌についての社会歴史的背景とその特徴が記述されていま



す。第26章 (Adachi) では、現代の幼稚園で行われている音楽活動の種類と頻度、2001年度に歌われた歌のトップ40、幼稚園教諭から見た子どもの好きな歌・嫌いな歌などについて報告されています。(なお、この章を執筆するにあたり、たくさんの日本語文献を引用させて頂きました。中には別刷りを頂いたものもありました。ご協力くださった皆様に、心より御礼申し上げます。)

Campbell, P. S. & Wiggins, T. eds. (2013)  
New York: Oxford University Press.  
656 pages, US\$135.00 (ハードカバー 14,480円)  
ISBN 978-0-19-973763-5

## 5-2 Musical Childhoods of Asia and the Pacific.

北海道大学 安達 真由美

“Advances in Music Education Research” というシリーズの3冊目であるこの本は、全11章からなり、バリ島、シンガポール、韓国、台湾、日本、フィリピン、オーストラリア、ミャンマー、インドにおける“子ども自身の音楽・音楽的行為”あるいは“子どもを取り巻く音楽”についての研究をまとめています。各章の終わりには、それぞれの著者が用いた研究法の良さや限界、注意点や難しさについての省察があり、将来の研究への一助となっています。拙稿(第7章)では、幼児向けの音楽レッスンで行われたさまざまな活動を子どもが家でのように遊びの中で自発的に復習しているか、また、その内容の発達的变化について、対象年齢の異なる事例研究の結果を報告しています。(ご感想、ご批判など頂ければ幸いです。)



Lum, C. & Whiteman, P. eds. (2012)  
Charlotte, NC: Information Age.  
278 pages, US\$41.35 (ペーパーバック 4,679円)  
ISBN 978-1-61735-774-9

## 6 報告

### 6-1 平成25年度第3回常任理事会報告

日時:平成25年10月11日(金)14:30~15:00

場所:弘前大学 50周年記念会館 会議室2

出席者:加藤,有本,今川(記録),伊野,今田,小川,奥,島崎,寺田,水戸

会長挨拶のあと、理事会に先立つ30分間の中で理事会と重複する議題は割愛し、必要な事項のみ検討することとした。

#### 【審議事項】

##### 1 審議事項

(1) 倫理綱領制定について  
資料に基づいて、倫理綱領作成委員会から提案された倫理綱領(案)について検討した。一部に語句の挿入をしたうえで、常任理事会として倫理綱領(案)を承認した。倫理ガイドブックについては学会誌別冊として発行する方向が確認された。

(2) 第46回大会について  
平成27年度に開催される第46回大会の開催地について話し合った(p.12,理事会記録参照)。

### (3) ワークショップについて

来年度開催されるワークショップについて、次の通り予定と進捗状況が報告された。

日 程：平成 26 年 8 月 21 日（木）

場 所：千葉大学教育学部音楽棟

タイトル：「長唄ワークショップ in 千葉」

内 容：長唄の唄や三味線、小鼓などの体験や鑑賞をとおして、長唄に親しむとともに、授業に生かせる指導のポイントを学ぶ。

講 師：長唄三味線の東音山田美由紀氏を中心に、長唄協会に講師派遣協力を依頼中である。

\*平成 25 年度第 4 回常任理事会（引き継ぎの常任理事会）

平成 26 年 2 月 22 日 場所：聖心女子大学

## 6-2 平成 25 年度第 2 回理事会報告

日 時：平成 25 年 10 月 11 日（金）15:00～17:00

場 所：弘前大学 50 周年記念会館 会議室 2

出席者：加藤、有本、今川、伊野、今田、小川、奥、阪井、島崎、菅（記録）、寺田、福井、水戸、南、村尾、安田、山本、吉富

会議に先立ち、加藤会長および大会実行委員長の今田理事から挨拶があった。

### 【報告事項】

#### 1 会務報告

今川事務局長から平成 25 年 5 月以降の会務について報告があった。

#### 2 選挙報告

中嶋選挙委員長に代わって今川事務局長より、選挙について滞りなく実施された旨、報告があった。

#### 3 各委員会等報告

##### (1) 編集委員会

伊野委員より、『音楽教育実践ジャーナル』vol. 11. no. 2 および大会特集号の準備を進めていること、現在進行中の投稿原稿は、ジャーナル報告が 3 本、学会誌論文 1 本が掲載予定、学会誌 3 本が再査読審議中であること、2014 年度 8 月発行の『音楽教育実践ジャーナル』vol. 12. no. 1 について原稿募集の予定であること、ジャーナルへの新規投稿多数あり、現在査読者等検討中であることが報告された。

##### (2) 国際交流委員会

今田委員長より立教ゼミナールの報告がなされた（p. 18, 6-4 参照）。

##### (3) 広報委員会

小川委員長より次号ニュースレターの締め切り 11 月 1 日であるとの告知がされた。

##### (4) 学会賞審査委員会

加藤委員長より、5 月 19 日の委員会において、「今回は該当なし」と決定された旨報告された。

##### (5) 将来構想ワーキンググループ

水戸理事より、公益法人への移行について検討した結果、音楽教育学会の規模の学会ではメリットはあまりなく、手続きが煩雑で、現段階では時期尚早と判断されたことが報告された。

#### (6) 音楽教育支援ポータルサイト

加藤会長より、次の4点について報告があった。

- ・仙台市内小学校への楽器提供を行った。
- ・日本学術会議が実施した東日本大震災に関わる協力団体の活動調査に対し、ポータルサイトの活動について回答した。
- ・東北地区会員に対してポータルサイトの認知度等について調査を行い、今後の活動を検討するうえで、貴重な意見を得た。
- ・ベトナム・ダナンの保育園よりの楽器提供依頼があり、ポータルサイトの本来の趣旨と異なるが、他に緊急の支援依頼がなかったこと、希望楽器のストックがあったことなどから提供した。

#### (7) 音楽文献目録委員会

木間委員に代わって今川事務局長より、目録最新号の受付が学会期間中に行われる見通しであること、電子検索システム構築に関わり、個人寄付の呼びかけを、客観的な情報提供のかたちで総会報告・ニュースレターに掲載予定。

#### (8) 立教ゼミナール報告

今田実行委員より、「英語で研究を海外に発信しよう!」「最先端の授業研究を学ぼう!」の両企画とも実り多いセミナーとなったこと、参加者は65名であったことが報告された。

#### (9) 韓国音楽教育学会との交流について

加藤会長から、以下の報告があった。

- ・8月に開催された韓国音楽教育学会大会において加藤会長が基調講演を行った。
- ・今後の交流について韓国現会長と非公式に協議をした結果、次のことが確認された。これまでのように独自のゼミナールやワークショップを交互に開催したり、相互に招待し合うことはやめ、無理をしない形で交流を継続する。

### 【審議事項】

#### 1 総会議題の確認

今川事務局長より、総会議題について、総会資料に基づき確認が行われた。

#### 2 投稿規定一部改定

伊野編集委員より、編集作業の円滑化のために、学会紀要と実践ジャーナルの締切日を年4回に変更する改定案が提出された。修正案の文章表現について一部修正の上、承認された。

#### 3 会則の一部改正について

水戸理事より、親睦と交流を学会の目的から削除する修正案が提出され、承認された。

#### 4 倫理綱領制定について

今川事務局長より、倫理綱領案作成の経緯および倫理ガイドブック作成の進捗状況について説明があり、資料に基づき倫理綱領案が提出され、承認された。

#### 5 第45回大会について

平成26年10月25～26日に聖心女子大学（東京）で開催予定。

#### 6 第46回大会候補地について

加藤会長より、常任理事会案として九州地区が提案され、承認された。

#### 7 来年度ワークショップについて

本多理事からの提案を今川事務局長が代読し、承認された（p.10、常任理事会記録参照）。

#### 8 新入会員及び退会者について

今川事務局長より7月22日以降の新入会員12名が資料に基づき報告され、承認された。退会者はなし。

## 9 その他

今川事務局長より、今年度の大会発表・参加申し込みの外注オンライン化について、学会事務局作業の合理化の必要性という点から趣旨説明が行われた。それに対して基本的な方向性が承認されたうえで、大会実行委員から、外注先企業の作業体制等について大会開催後に検証する必要性が提起された。

新入会員（平成25年7月21日常任理事会以降）：12名

【9月30日現在 正会員数1533名 学生会員数1名 特別会員数3名】

\* 次回理事会（平成26年度第1回理事会） 平成26年5月上旬の予定。場所未定。

## 6-3 平成25年度総会報告

日 時：平成25年10月12日（土）18：05～19：05

場 所：弘前大学 50周年記念会館 みちのくホール

開会に先立ち、今川事務局長より出席者81名、委任状287通、合計368名であることが報告された。日本音楽教育学会会則第13条にもとづき、会員総数（本日時点で1533名）の5分の1の定足数（307名以上）を満たしていることにより、総会の成立が確認された。

1. 開会の辞 有本真紀副会長
2. 挨拶 加藤富美子会長
3. 議長選出 長島真人会員（鳴門教育大学）が選出された。

### 4. 報告事項

1) 会務報告（今川恭子事務局長）

総会資料に基づき、昨年度総会以降（平成24年10月9日～平成25年10月12日）の会務報告および今年度末までの予定が報告された。

2) 選挙報告（中嶋俊夫選挙管理委員長）

平成25年6月から7月にかけて、「第21期日本音楽教育学会会長選挙」ならびに「第21期日本音楽教育学会理事選挙」が滞りなく実施され、結果についてはすでにニュースレター53号に掲載済みであることが報告された。投票率が低下していることから（今回26.5%）、次回選挙での投票が呼びかけられた。

3) 各委員会等から

(1) 編集委員会（尾見敦子委員長）

総会資料にもとづき、投稿規定の改定が報告された。新規定は平成26年4月1日より実施される。

#### ① 『音楽教育学』投稿規定

##### IV 原稿の送付の1.

改定後（新）	改定前（旧）
発刊期日との関係で、5月15日、8月15日、11月15日、2月15日の年4回を締切とする。ただし、投稿は随時受け付ける。	発刊期日との関係で、6月15日、12月15日の年2回を締切とする。ただし、投稿は随時受け付ける。

#### ② 『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定

### III 原稿の送付の1.

改定後（新）	改定前（旧）
発刊期日との関係で、自由投稿は5月15日、8月15日、11月15日、2月15日の年4回を締切とする。特集投稿は第1号は2月15日、第2号は8月15日を締切とする。	発刊期日との関係で、8月発行の第1号は3月15日、3月発行の第2号は9月15日を締切とする。

#### (2) 国際交流委員会（今田匡彦委員長）

立教ゼミナールの報告がなされた（p. 18, 6-4 参照）。また、来年7月にブラジルで開かれる ISME への参加が呼びかけられた。

#### (3) 広報委員会（小川容子委員長）

ニューズレターの新刊紹介コーナーに掲載する情報を募集しており、著書や CDなどを公表した（予定含む）会員は、広報委員会に連絡してほしい旨の呼びかけがなされた。

#### (4) 学会賞審査委員会（加藤富美子委員長）

5月19日に学会賞審査委員会が開催され、第3回学会賞は該当なしと決定したことが報告された。

#### (5) 倫理綱領作成委員会（権藤敦子委員長）

日本音楽教育学会倫理綱領案を作成し、理事会での審議を経て本日の総会での提案に至ったこと、および、『倫理ガイドブック（仮題）』について、平成26年6月に学会誌の別冊として会員のもとに届けられるよう編集作業が進められていることが報告された。

#### (6) 将来構想ワーキンググループ（北山敦康理事）

会長諮問により、新公益法人法への対応をWGおよび常任理事会において検討した結果、現在の学会規模では法人化は時期尚早であり、任意団体を維持する方針であることが報告された。

#### (7) 音楽教育支援ポータルサイト（加藤富美子会長）

本年度の活動について、4点が報告された（p. 11, 理事会記録参照）。

#### (8) 音楽文献目録委員会（木間英子委員）

以下4点の報告があった。

- ・2012年度～2013年度の委員長に、樋口隆一氏（日本音楽学会）が互選により再任された。
- ・『音楽文献目録 第40号』（2012年10月1日付）の発行。
- ・国際版目録の分類が若干変更され、国内版第41号から最新の分類に合わせて変更するかを検討。
- ・『音楽文献目録』1号～40号までの総索引を作成し、Webで検索できるシステムを構築するプロジェクトが進行中で、2014年4月に試験運用開始の予定。花王財団からの助成金および寄付金をあてているが、予想経費はそれを上回るため、本検索システムの周知とWeb契約の獲得、個人寄付が課題。

#### 4) ゼミナール報告（今田匡彦実行委員）

第12回音楽教育ゼミナール（立教ゼミナール）の報告がなされた（p. 11, 理事会記録参照）。

#### 5) 来年度ワークショップについて（本多佐保美理事）

来年度ワークショップについて提案があり、承認された（p. 10, 常任理事会記録参照）。

#### 6) 事務局から（今川恭子事務局長）

会員の個人情報管理に関する基本方針が報告された（p. 20, 7-1 参照）。

今大会より発表と参加申込がWeb登録となり、外注先の対応に不慣れな点があっご迷惑をおかけしたが、今後の改善を要請したこと、事務局運営上のメリットは大きいことが報告された。また、事務局会員管理システムの改善を進めることについても報告があった。

## 5. 審議事項

1) 平成 24 年度会計報告（島崎篤子理事）・監査報告（伊藤誠会計監事）

大会プログラム掲載資料にもとづき、平成 24 年度一般会計、その他会計について会計報告が行われ、財政状況として良好であることが示された。監査の結果、間違いのないことが報告され、承認された。

2) 平成 25 年度事業計画（今川恭子事務局長）および補正予算（島崎篤子理事）

(1) 総会資料にもとづき、平成 25 年度事業計画の日付が確定したことが報告され、承認された。

### 平成 25 年度事業計画

<b>平成 25 年</b>	
4 月 29 日	平成 24 年度会計監査会
5 月 19 日	平成 25 年度第 1 回編集委員会 平成 25 年度第 1 回常任理事・理事会
6 月 23 日	第 44 回大会研究発表・共同企画申し込み締切
6 月下旬	『音楽教育学』第 43 巻第 1 号 発行 ニュースレター 第 52 号 発行 第 21 期日本音楽教育学会会長・理事選挙
7 月上旬	平成 25 年度第 2 回常任理事会 平成 25 年度第 2 回編集委員会 第 44 回大会研究発表受理通知
8 月 24, 25 日	日本音楽教育学会 第 12 回音楽教育ゼミナール（立教ゼミナール）『音楽教育実践ジャーナル』vol. 11. no. 1 発行 ニュースレター 第 53 号 発行
8 月下旬	第 44 回大会プログラム発送
10 月 11 日	平成 25 年度第 3 回編集委員会 平成 25 年度第 3 回常任理事会・第 2 回理事會
10 月 12, 13 日	第 44 回大会・総会 会場：弘前大学
12 月下旬	『音楽教育学』第 43 巻第 2 号 発行 ニュースレター 第 54 号 発行
<b>平成 26 年</b>	
2 月中旬	平成 25 年度第 4 回編集委員会 平成 25 年度第 4 回常任理事会
3 月末日	『音楽教育実践ジャーナル』vol. 11. no. 2 発行 ニュースレター第 55 号 発行 平成 25 年度会計決算

(2) 大会プログラム掲載資料にもとづき、補正予算案が提案され承認された。修正点は以下のとおり。正会員会費は 7 月の常任理事会時点の会員実数に基づいている。24 年度決算の結果前年度繰越金が増額し、会員数増加分の会費も増える。一般会計支出では、倫理ガイドブックの発行を見込んで研究出版基金を 95 万円としたほか、大会運営事務局経費、例会運営費、会議費、分担金、学会基金、予備費を増額し、事務局費を減額した。いずれも実情に合わせたの修正である。その他会計では、研究出版基金から倫理ガイドブック作成費支出が加わり、学会賞の該当がなかったために学会基金からの支出がなくなった（p. 17 参照）。

3) 平成 26 年度事業計画（今川恭子事務局長）

総会資料にもとづき、平成 26 年度事業計画が提案され、承認された。

### 平成 26 年度事業計画

<b>平成 26 年</b>	
4 月中旬～ 下旬	平成 25 年度会計監査会
5 月初旬	平成 26 年度第 1 回編集委員会 平成 26 年度第 1 回常任理事・理事会
6 月中旬	第 45 回大会研究発表・共同企画申し込み締切

6月下旬	『音楽教育学』第44巻第1号発行	ニューズレター 第56号発行
7月上旬	平成26年度第12回常任理事会	平成26年度第2回編集委員会
	第45回大会研究発表受理通知	
8月	日本音楽教育学会第7回夏期ワークショップ	
8月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』vol.12.no.1発行	ニューズレター 第57号発行
	第45回大会プログラム発送	
10月24日	平成26年度第3回編集委員会	平成26年度第3回常任理事会・第2回理事会
10月	第45回大会・総会	
12月下旬	『音楽教育学』第44巻第2号発行	ニューズレター 第58号発行
平成27年		
2月中旬	平成26年度第4回編集委員会	平成26年度第4回常任理事会
3月末日	『音楽教育実践ジャーナル』vol.12.no.2発行	ニューズレター第59号発行
	平成26年度会計決算	

4) 平成26年度予算（島崎篤子理事）

大会プログラム掲載資料にもとづき、平成26年度予算案が提案、承認された（p.17参照）。

5) 会則の一部改正について（北山敦康理事）

総会資料にもとづき、会則の一部改正が提案され、原案のとおり承認された。なお、項目削除にともない、括弧つき番号も削除してはどうかとの質問があったが、今後、さらに会則が改正される時のことを考慮に入れて、原案の通りとなった。

日本音楽教育学会会則の一部改正（案）

改正案	現行
第1章 総則 《略》	第1章 総則 《略》
第2条 本会の目的は次のとおりである。 (1) <u>本学会は、音楽教育に関する会員相互の研究協議をとおして、音楽教育研究の振興と音楽教育活動の発展に貢献することを目的とする。</u> (2) 《削除》 (3) 《削除》 《略》	第2条 本会の目的は次のとおりである。 (1) 音楽教育研究の振興 (2) 音楽教育研究者の親睦と交流 (3) 国内外の音楽教育研究団体との交流 《略》

附則

この改正は、平成25年10月12日から施行する。

6) 倫理綱領について（権藤敦子倫理綱領作成委員会委員長）

総会資料にもとづき、倫理綱領の作成経緯を説明した上で、「日本音楽教育学会倫理綱領」が提案され、承認された（全文は学会ホームページに掲載）。今後は、『倫理ガイドブック（仮題）』の刊行によってこの倫理綱領の内容を広く会員と共有し、理解と実行に向けて引き続き努力していくことが確認された。

☞ 倫理綱領（全文）はこちらから。

[http://www.kayoo.info/JMES-home/summary/pdf/ethics\\_131028.pdf](http://www.kayoo.info/JMES-home/summary/pdf/ethics_131028.pdf)

7) 第45回大会について (加藤富美子会長)

加藤会長より、第45回大会は聖心女子大学において、平成26年10月25日・26日(予定)に開催することが提案され、承認された。聖心女子大学岡崎淑子学長から寄せられた歓迎のメッセージを、今川事務局長が代読した。

来年度大会開催校からのメッセージ

聖心女子大学学長 岡崎 淑子

日本音楽教育学会第45回大会が聖心女子大学で開催されますことを心から嬉しく思います。大学を代表致しまして歓迎の意を表します。

聖心女子大学は1948年に聖心女子学院高等専門学校を前身として発足した、日本最初の新制女子大学の一つでございます。本学の教育は、キリストのみこころに学び、学業の成果をもって社会との関わりを深めることをめざす聖心スピリットを根幹としております。人と社会にとっての大切な営みである音楽教育の研究と実践が高められ、深められる大会となるよう、聖心スピリットをもって精一杯のお手伝いをさせていただき所存でございます。キャンパスは渋谷区広尾、都心ながらも豊かな緑に囲まれた一角でございます。その地で皆様にお目にかかれますことを楽しみにしております。

最後になりましたが、第44回大会弘前大会の開催にあたり多くのご準備を重ねて来られた大会実行委員会ならびに弘前大学関係者の皆様に心からの敬意を表し、今大会の成功をお祈り申し上げます。

8) 第46回大会候補地について (加藤富美子会長)

九州地区での開催が承認された。

9) 次期役員について (小川容子次期会長)

小川次期会長より、10月12日開催の「役員選出のための理事会」において、以下のとおり決定したと報告がなされた。

○副会長＝伊野義博

○事務局長＝本多佐保美

○常任理事＝本多佐保美(事務局長)、加藤富美子(企画)、嶋田由美(企画)、水戸博道(国際交流)、北山敦康(総務)、中地雅之(総務)、三村真弓(編集)、杉江淑子(会計)、佐野靖(会計)、権藤敦子(広報)

○理事＝尾藤弥生(北海道)、小畑千尋(東北)、伊野義博(北陸)、中嶋俊夫・木村充子(関東)、新山王政和(東海)、安田寛・村尾忠廣(近畿)、松本正・福井昭史(九州)

○地区代表理事＝尾藤弥生(北海道)、小畑千尋(東北)、伊野義博(北陸)、中嶋俊夫(関東)、新山王政和(東海)、村尾忠廣(近畿)、三村真弓(中国四国)、未定(九州)

\* なお、理事会終了後のメール会議で、九州地区の地区代表理事は、福井昭史理事に決定した。

6. 議長解任

7. 閉会の辞 (有本真紀副会長)





「長唄ワークショップ in 千葉」のご案内

実行委員長 本多 佐保美

来年度夏期ワークショップの概要が決まりました。

内容の詳細ならびにお申し込みについては来年度ニュースレターでお知らせ致します。

日時：平成26年8月21日（木）

場所：千葉大学教育学部音楽棟

長唄の唄や三味線、小鼓などの体験や鑑賞をとおして、

長唄に親しむとともに、授業に生かせる指導のポイントを学びましょう！

会員の皆様の参加を心よりお待ちしております。

#### 6-4 国際交流委員会から

国際交流委員会委員長 今田 匡彦

国際交流委員会では、今回初めての試みとして第12回音楽教育ゼミナール〈立教ゼミナール〉にて「英語で研究を海外に発信しよう！」を開催し、22名が参加しました。第1日目の Mimi Hung-Pai Chen 先生 (Assistant Professor at Chinese Culture University in Taipei, Taiwan) による基調講演は、先生と英語をめぐるさまざまなエピソードが、真摯にそしてユーモラスに語られ、続くディスカッションへの建設的な刺激となりました。第2日目の柴崎かがり先生 (Roehampton University) のワークショップは、前日の Chen 先生の講演と有機的に繋がった実りの多いものとなりました。このゼミナールについては、第44回大会の院生フォーラムでも参加者からの報告がありました。国際交流委員会では第1回目の成果を更に展開させるべく、次回に向けての企画を立案中です。

2014年7月20日から25日、ブラジルの Porto Alegre にて ISME が開催されます。大会、コミッション・セミナーともに発表の受付は終了していますが、Observer 参加はこれからの申込みとなります。以下のサイトをご参照下さい。

☞ <http://www.isme.org/presidents-welcome>

2014年6月5日から8日、カナダの University of Waterloo にて “Sound in the Land” (Festival & Conference) が開催されます。基調講演者には R. マリー・シェーフアーが予定されています。詳細は以下のサイトをご参照ください。

☞ <https://uwaterloo.ca/grebel/sound-land-2014>

2014年10月18日と19日の両日、弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにて、音楽教育の国際シンポジウム、Hirosaki University International Symposium, “Proposing a New Music Education View Through Non-European Sound Practices” が開催されます。海外からの招聘研究者は以下の通りです。

Henry Johnson (University of Otago, New Zealand), Lauri Vakeva (Sibelius Academy, Finland), Chi Cheung Leung (Hong Kong Institute of Education, Hong Kong), Anita Prest (University of British Columbia, Canada)

☞ 詳細は次のところへ：今田匡彦 ([timada@cc.hirosaki-u.ac.jp](mailto:timada@cc.hirosaki-u.ac.jp))

#### 6-5 編集委員会から

編集委員会委員長 尾見 敦子

## 第2回編集委員会報告

2013年度第2回編集委員会は、8月21日(水)に東京藝術大学で開催されました。委員会での報告、協議内容は以下の通りです。

1. 『音楽教育学』・『音楽教育実践ジャーナル』進捗状況について  
『音楽教育実践ジャーナル』vol. 11. no. 2 (特集テーマ「音楽教育と電子テクノロジー」)は編集作業が進行中である。自由投稿の3本の「報告」が掲載予定。
2. 投稿原稿の採否について  
『音楽教育学』への新規投稿論文は10本で、審議の結果、4本が再査読、6本が不採択となった。再査読の1本が採択となり、『音楽教育学』第43巻第2号に掲載予定。

## 第3回編集委員会報告

2013年度第3回編集委員会は、10月11日(金)に弘前大学で開催されました。委員会での報告、協議内容は以下の通りです。

1. 総会で次の報告を行う。[※『音楽教育学』・『音楽教育実践ジャーナル』の締切を、来年度から年4回(5月15日, 8月15日, 11月15日, 2月15日)に変更する。これにより、投稿者への速やかな結果通知と、採択から掲載までの期間の短縮化をはかる。]
2. 『音楽教育学』・『音楽教育実践ジャーナル』進捗状況について  
『音楽教育実践ジャーナル』vol. 12. no. 1 (特集テーマ「音楽教育におけるリズム活動を再考する～音・動き・ことばからのアプローチ～」)の特集原稿募集文はホームページには掲載済みであるが、弘前大会の参加者全員に配布し、周知徹底を図る。
3. 投稿原稿の採否について  
再査読となっていた2本のうち、1本が採択となり、『音楽教育実践ジャーナル』vol. 11. no. 2に掲載される予定である。『音楽教育実践ジャーナル』への特集投稿は8本で、5本が特集の構成に合わせた修正を条件に採択となった。自由投稿(報告)は3本で、2本が修正を条件に採択となった。『音楽教育学』への投稿論文1本は不採択。
4. 『音楽教育学』第44巻第1号の「研究動向」のテーマを「幼児と音楽」に決定した。

## 【お知らせ】

『音楽教育学』・『音楽教育実践ジャーナル』への投稿時に提出する投稿申込書「別紙2」の「投稿者用チェックリスト」の第18項目を、以下のように改訂します。

写真等を使用している。[はい・いいえ] 使用している場合、権利者、被写体になった人(またはその保護者や責任者)から投稿・公刊の承諾を得、承諾を得た旨を原稿中に明記している。[はい・いいえ]

どなたかの写真を論考中に掲載する場合には、肖像権への配慮が必要です。プライバシーにかかわる場合もありますし、パブリシティ権などが発生する場合もあります。いずれの場合も人格権にかかわる問題ですので、写真を使用する場合には、権利者、被写体になった人(またはその保護者や責任者)から投稿・公刊の承諾を得ておくことがのぞましいといえます(著作権情報センターのウェブサイトと電話相談による)。

また、テレビ番組等からの引用については、研究・教育目的で画像を使用する場合の説明がNHKのウェブサイトに掲載されています。参考にしてみてください。

## 7 事務局より

### 7-1 個人情報の提供と取り扱いについて

事務局長 今川 恭子

個人情報の提供と取り扱いに関して、下記の原則が理事会で承認され、総会で報告されました。事務局では今後この原則にそって、会員の皆様の情報を適切にお預かりすると同時に、

学会活動において必要に応じて活用させていただくこともございます。会員情報管理に関してご質問がある場合は事務局にお知らせください。

## 記

学会が収集した会員の個人情報、各種委員等の委嘱、学会誌の編集と査読、ニューズレターの編集、大会司会者の選出、ゼミナールやワークショップ等各種学会企画の企画・運営、その他学会本来の目的に沿った活動において必要が生じた場合に活用する。それ以外の目的には原則として使用しない。万が一、目的外の使用の必要性が生じた場合は理事会の技を経て使用することもあるが、原則として学会活動に資することを目的とするものに限る。

## 7-2 お知らせ

### 1. 年会費の納入をお願いします。

未納の方へお葉書を送付しております。年度内のお振込みをお願いいたします。

### 2. メールアドレスの登録をお願いします。

年度会費納入の確認作業を事務局で行なうと、会員のお手元に確認メールが自動送信されます。メールアドレスが未登録の方、アドレス登録済みで会費納入したのに確認メールが来ないという方は、事務局にご一報くださるようお願いいたします。なお、事務局開局時間の関係や業務の多寡によって、会費納入後確認メール送信まで2週間程度要することもありますのでご了承ください。

### 3. 『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。今年度限定のお得なセット販売も行なっております。詳しくはホームページをご覧ください。

#### ◆事務局開局時間

月・水・金 9:00~15:00

※年末年始の閉局時間は下記の通りです。この間のご連絡はE-mailまたはFAXにてお願いいたします。

閉局期間：2013年12月28日～2014年1月14日

☞ E-mail: onkyoiku@remus.dti.ne.jp / FAX: 042-381-3562

#### ..... 【編集後記】 .....

今年の大会は弘前大学で開催されました。大会前に配布された大会ポスターやスタイリッシュな大会ホームページなど事前のPRもすばらしかったですが、大会当日の運営にも数々の工夫がみられました。特に各発表会場にお花が飾られていたことには感心しました。会場の雰囲気であたたかくし、私も一発表者として本番前の緊張感が和らぎました。気づけば今年もあとわずかとなりました。新しい年が皆様にとりまして素晴らしい一年でありますように！（齊藤忠彦）

今年も、会員の皆様からたくさんのご寄稿をいただき、充実した誌面づくりをすることができました。ありがとうございました。本年度のニューズレターは、残すところ、新年3月発行分の1回となります。引き続き、新刊・近刊図書の紹介やイベント、研究会等の報告など、皆様からのお知らせをお待ちしております。（長井覚子）

.....



#### 【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX：042-381-3562 E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 \*郵便物は私書箱へ

開局日：月・水・金

開局時間：9:00~15:00